

E R S 10周年を迎えての所感

岡本舜三*

生産技術研究所に在って地震工学に興味をいさぐ同志が集ってERS(Earthquake Resistant Structure Research Center)という研究グループを作ってから早くも10年になる。それはついこの前のように思えるのに、月日のたつのが早いには驚かされる。この間、毎年一冊ずつのレポートが出た。レポートは国際的に認められるように英語で書こう、またBack Numberが買い揃えられるようになってこそ意義があるのだから、途中で改めなくてもよいように体裁を立派にして、毎年欠かさずに出そう、という最初のもくろみは守られた。

会員は原則として大学研究者に限定し、academismに特徴をもたせよう、という方針も貫かれた。もっともこの方針には象牙の塔にこもってしまう危険が懸念されたが、年月がたつにつれて、かつては本所に在籍し、今では実社会で活躍している会員の数がふえたので、それは杞憂に終わった。全く予期せざる良き狙であった。

すべては最初の狙のとおり、物事が10年間順調に運んだということは喜ばしいことであるが、これは言うまでもなく生産技術研究所の暖い理解があったからで、感謝のほかはない。もう一つの理由はこのグループが同志によって自然発生的に生まれたものであったことであろう。最初に目的があり、企画になれた人が組織図やシステム図をかいて、必要な人員配置や予算措置を施し、それから研究が始まるという上部主導型のものでなかったからであろう。全くの自然発生であり、とくに指図や干渉をする人もなく、幹事研究室も1年ずつ廻り持ちというやり方も悪くなかったようで、幹事研究室がそれぞれ工夫をこらして打ち出す新機軸によって、グループは絶えず生氣を保っていくことができた。

しかし欠点もある。すなわちそれを排除した上部主導型運営のもつ良い点がないことが、そのまま欠点になっているように思う。最初から組織的に計画されていれば今頃は生研附属の研究施設となり、10年もたっているのだから、もっとまとまった研究成果を得ていたかも知れない。あるいは「臨時事業」という恵まれた条件下にあったのだから、地震工学研究のメッカにまで発展していたかも知れない。この点内部に在る吾々は学問を楽しませていただき有難かったが、外部から見ると物足りない点であろう。しかし研究というものはしよせんこういうも

のであって、どちらが良かったか、にわかには判じ難いことである。

ただ事務的観点からすれば、生研当局の正式の承認なしにERSという一見所内公式機関のようなものがあるのは問題であろう。このことはレポート第1号を出すとき一度問題になったが、その後あまり煮つめられずに今日に至っている。私は研究グループは自発的に出来るのが本来の姿であって、あまくだりに作られる性質のものではないと思っていたし、その考は今でも変わってはいない。しかし、それはそれとして、はじめに所に充分連絡して所定の手続をとっておくべきであった。手続をとった場合に、つれなく押し潰されるようなことはなかったであろうことは、その後の所の暖い配慮から充分推察される。もちろん設置法にないものを官制上の附属機関にできるはずのものではないが、それは研究上は本質的なことではない。ただ所からは正式に存在を認めていただい

ておくべきであったと思う。

この10年間にこの研究グループは地味ではあったがそれなりの成果をあげてきた。費用の関係から年に一回しか出ないレポートではあるけれども、その存在は外国でも認められており、外人の中にはこのセンターを立派な建物をもつ研究所かと思っている人さえある。また臨時事業への協力のおかげで立派な実験設備も作っていたに違いないし、公式にセンターといってもおかしくないだけの内容はととのっている。こうした情勢をみるならばちょうど10周年を迎えるのを機会に所に申し出て、このグループを正式の所内機関として認めていただくようにすべきではあるまいか。もちろんその場合にERSを作った当時の基本的考え方は失いたくない。公式機関だといって、事務的なことにこだわり過ぎると、組織は完璧で中味は空虚という世間によくある無意味な団体に墮しかねない。その点は充分注意すべきことである。

次に研究内容を考えてみると、この会の出来た頃は地震工学は黎明期であった。興味の湧くままに何をしても成果になった。実在構造物の振動減衰係数がわからない。そこで野外に出て測れば、それなりに役立つ資料が得られた。強震のデータが乏しい。ではというので自起働式地震計を試作して配置に努力すれば、地震ごとに多数の記録がとれて、未知の事実がぞくぞくと見出された。折から高速計算機が発達してきたのでそれを活用すれば、理論的に存在はわかっているにもかかわらず具体的な

* 東京大学名誉教授

た建物の応答振動形を算出し得て、目で確かめその性質を知ることもできた。また地震がおこれば現地にとんでゆきさえすれば未知の事実、たとえば砂地盤の液化化現象などを容易に見出すことができた。もちろんこれらは座して得られた成果ではなく、新型計器を手作りで仕上げたり、現地試験の交渉に官庁を訪ねたり、いろいろの骨折りはあったが、しかしその骨折りを上回る成果が得られて、研究者をして発見の喜びにひたらせたものであった。

物事の黎明期は何事によらずこのような状況であろう。むずかしいのはその次の時代である。耐震工学研究もようやく第一の時代を終わり、次の時代には入ろうと

して、今一つの壁にぶつかっているように思われる。ERSも創立10周年を迎えるとともに、このむずかしい時代に入ってきたのであり、研究上の飛躍が待望されること今ほど切なる時はない。当初に academism を貫こうとした趣旨はこうした時に飛躍ができないようでは困るからであった。この際ERSの中から地震工学の今後の歩みの示標となるような論文がぜひ生れてきてほしいものである。10年というのはいろいろの意味でたしかに一つの区ぎりである。その研究内容においても、所内の位置づけにおいてもここで一つの飛躍をとげることがERSの将来の発展を約束するものであらうと思われる。

(1977年1月24日受理)

